シンポジウム D

「国連海洋科学の10年」をどう進展させるか その2 「健全かつ回復力の高い海」

開催日時：2025年9月21日（日）13:00～17:00

会場：第4会場（北海道大学函館キャンパス 講義棟 第6講義室）

主催：日本海洋学会

共催：日本海洋政策学会、国連海洋科学の10年国内委員会

コンビーナー：原田尚美（東京大学）、栗原晴子（琉球大学）、前川美湖（笹川平和財団アジア・イスラム事業ユニット）

趣旨

2021年～2030年の10年間、「持続可能な開発目標（SDGs）」のNO.14「水圏の命を守ろう」の取り組みを加速させるための「国連海洋科学の10年」。研究教育機関および政府、地方自治体、民間企業、市民など様々なステークホルダーたちが協働しながら7つの社会目標「きれいな海」「健全かつ回復力の高い海」「生産的な海」「予測できる海」「安全な海」「万人に開かれた海」「夢のある魅力的な海」の達成を目指している。海洋学会メンバーとして海洋リテラシーの向上や教育などに加えて、他に何ができるか、理想的な活動はどのようなものか、どう推進していくべきかについて、学会、組織、コミュニティの垣根をこえて、現在の好事例や取り組みについて情報を交換し、さらに工夫できることや今後期待される取り組み、その取り組みをいかに行動に結びつけるか？というところまでシンポジウムの成果として出して行きたい。7つの目標のうち毎回1つの目標に焦点を当てて深く掘り下げるシンポジウムとし、2025年は2回目で「健全かつ回復力の高い海」を取り上げる。

シンポジウムとして開催する意義は、必ずしも海洋学会員ではない方でも、多様な組織から最適の方にプレゼンしていただき、ネットワーク作りや交流を深めることにある。国連海洋科学の10年を一緒に推進する機会としたい。

プログラム

13:00-13:10 「主旨説明」原田尚美・東京大学大気海洋研究所

13:10-13:45 「健全かつ回復力の高い海～サンゴ礁を事例に～」

栗原晴子・琉球大学 教授

- 内容：サンゴ礁生態系は海域のわずか数%の面積を占めるにも関わらず、全海洋生物の25%が生息し、高い生物多様性と生産性を誇り、多くの生態系サービスを提供している。一方で気候変動や沿岸開発などによる環境変動に対して最も脆弱

な生態系でありその持続的な維持が危ぶまれている。本発表では、現在国内外で実施されているサンゴ礁生態系の保全や維持に関わる研究や取り組み事例や紹介するとともにその課題や今後について考察する。

13:45-14:20 「海洋保護区のための持続可能な資金調達について―日本の沿岸域の経験を通じて」

前川美湖・笹川平和財団アジア・イスラム事業ユニット 主任研究員

- 内容：国内外の沿岸管理の課題である持続可能な資金調達の事例分析を紹介する。北海道知床、沖縄県恩納村、岡山県日生の3カ所の調査対象地は、日本における沿岸域の典型的なケースとして取り上げた。各サイトにおける資金源の構成や特徴、課題を提起する。

14:20-14:55 「むつ研究所の沿岸観測網構築と情報発信～地元漁業関係者との連携～」

佐々木健一・海洋研究開発機構むつ研究所 所長

- 内容：JAMSTEC むつ研究所は、海洋地球研究船「みらい」の基地であり、船舶の出入港をスムーズにするために、地元の漁業関係者との情報交換を丁寧に行っている。この関係は、研究所が面する津軽海峡で沿岸環境の変動を把握するための観測網構築の際にも活用されてきた。漁業関係者との連携による沿岸環境の把握と情報発信など、むつ研究所が実施してきた取り組みについて紹介する。

14:55-15:10 休憩

15:10-15:45 「未来世代に豊かな海を繋ぐ―海とこんぶの森プロジェクトの挑戦―」

伊藤慶子・株式会社 WMI 代表

- 内容：魚や貝が育つ豊かな海には、海藻が繁茂する藻場が不可欠である。現在、北海道において「こんぶの森」として藻場を再生し、多様なステークホルダーとともに環境と経済を循環させる仕組みを構築している。本発表では、子どもたちへの環境教育を通じ、次世代へ豊かな海をつなぐ取り組みについて報告する。

15:45-16:20 「持続可能な地域水産業の構築～函館マリカルチャープロジェクト～」

三瓶 真・北海道大学大学院水産科学研究院 特定専門職員

- 内容：持続可能な水産・海洋都市を構築するための函館市と北大の連携によるサケ・コンブなどの養殖産業創出と人材育成のプロジェクト

16:20-17:00 ディスカッション